

平均寿命の延びと公的年金

菅 原 周 一 CMA

(証券アナリストジャーナル編集委員会委員)

1. はじめに

平成28年度簡易生命表の概況（平成29年7月27日発表）によると、日本人の平均寿命は1965年時点で男性が67.74歳、女性が72.92歳であったものが、90年には男性が75.92歳、女性が81.90歳に、そして2016年には男性が80.98歳、女性が87.4歳にまで延びている。健康寿命も同様に男女ともに年々延びてきている。01年では男性が69.40歳、女性が72.65歳であったものが、16年には男性が72.14歳、女性が74.79歳となっている。

かつて、人間の平均寿命はある水準で頭打ちになり、それ以上延びることはないと考えられていた。しかし、医療技術が大きく進歩していることもあり、この定説は覆されようとしている。それでは、人間の平均、健康寿命はどこまで延び、この寿命の延びは今後の公的年金の財政にどのように影響してくるのであろうか。また、老後の備えとして、国民一人一人、中でも若い世代の人たちがどのような準備をする必要があるのであろうか。

2. 医療技術の進歩と平均寿命の延び

厚生労働省は平成29年6月14日に「平成27年都道府県別年齢調整死亡率（注1）の概況」を発表し、「平成27年は男性486.0、女性255.0で、前回（平成22年）と比較すると、男性は58.3ポイント、女性は20.0ポイント低下し、死亡状況は改善されている」として、医療技術の進歩や健康志向の高まりなどを背景に、死亡率は年々低下しているとしている（図表1の「年齢調整死亡率の年次推移」を参照）。この図表から、日本人の死亡率が、着実に低下していることが確認できる。

また、最近の人工知能の急速な進化の成果が健康や医療に応用されつつあり、これまでの平均寿命の直線的な延びから逃れられるのではないかと指摘もされている。人工知能研究の第一人者であり未来学者でもあるレイ・カールワイツ（現在はGoogle社で人工知能を研究）がマサチューセッツ工科大学で行った講演（注2）で「I believe they're only about a decade away from longevity escape velocity where there is more

（注1） 都道府県別に、死亡数を人口で除した通常の死亡率（以下、粗死亡率）を比較すると、各都道府県の年齢構成に差があるため、高齢者の多い都道府県では高くなり、若年者の多い都道府県では低くなる傾向がある。このような年齢構成の異なる地域間で死亡状況の比較ができるように年齢構成を調整した死亡率が年齢調整死亡率（人口10万対）である。この年齢調整死亡率を用いることによって、年齢構成の異なる集団について、年齢構成の相違を気にすることなく、より正確に地域比較や年次比較をすることができる（厚生労働省ホームページより引用）。